

恋ヶ窪村分水跡を歩く・見る・聞く

エックス山等市民協議会

夜来の雨が上がり、皆さんが集まる頃には青空が広がり絶好の散策日和。そんな中、21名の方に参加いただき開催しました。集合場所は恋ヶ窪駅前団体用広場。出欠確認を行い、挨拶や散策コースの説明のあと、西武国分寺線と恋ヶ窪駅の歴史についてふれ、線路沿いを最初の目的地砂川用水に向けて出発しました。



① 西武国分寺線（恋ヶ窪駅）

甲武鉄道（現 JR 中央本線）が開通し、国分寺駅が開業したのは明治22年（1889）のこと。その5年後の明治27年（1894）には川越鉄道が国分寺—東村山間に敷かれ、翌年には川越（現本川越）まで開通します。川越鉄道は現在の西武国分寺線（西武新宿線）で、同線は西武鉄道の中で最も古い路線となっています。

川越鉄道は埼玉の人々の強い要望で敷設されました。当時、国分寺の人口3千人弱に対して、川越は2万人、所沢も5千人を擁し、絹布や綿布などの集散地、市場町として栄えていました。

これらの商品を大消費地である東京へ送り出すために、鉄道を必要としたのです。川越と東京を直線的に結んだ方がよさそうですが、そのためには荒川を越えねばならず、工事も費用も大がかりになるので国分寺経由のルートが選ばれました。開通時は1日5往復、途中駅は小川、東村山、所沢、入曽、入間川、南大塚の6駅でした。恋ヶ窪駅が開業したのは、それから60年後の昭和30年（1955）2月のこと。当時、駅の周り是一片の畑でした。

② 玉川上水と恋ヶ窪村分水、砂川用水

五日市街道の脇を流れる砂川用水、ここからが今回のエコミュージアムのテーマ“恋ヶ窪村分水”の始まりですが、そのためには玉川上水と武蔵野の新田開発から話を始めなければなりません。

■玉川上水

慶長8年(1603)、徳川家康は江戸幕府を開きます。当時の江戸は満潮時には海水が入り込む湿地帯で、家康は飲み水を確保するため小石川上水を整備し、江戸の町の拡大と人口増に対応しさらに神田上水を整備しました。その後、3代将軍家光の頃になると参勤交代が確立し、大名やその家族・家臣が江戸に住むようになり人口が増加、さらなる飲み水の確保が必要となりました。ちなみに、寛永11年(1634)に約15万だった人口は、明暦3年(1657)に約28万人を数え、その後、享保6年(1721)には100万人に達します。

このような中で、幕府は承応2年(1653)4月に玉川上水の工事に着手、わずか8か月で羽村から四谷大木戸まで約43kmを開削します。今から370年前のことです。玉川上水は江戸市中の飲料水・生活用水のほか、江戸城の濠や大名屋敷の庭園にも引かれ、上流の武蔵野台地では数多くの分水が掘られて新田開発が進められ、飲料水・生活用水・田用水・水車の動力源として利用されました。

当時、国分寺市のある武蔵野台地はススキや萱に覆われた荒れ野で、水に恵まれず、ハケの湧水や野川の近くにわずかばかり人が住む土地でした。玉川上水の通水後に引かれた分水により、現国分寺市のほとんどの地域に生活用水の確保ができるようになり、新田開発が進み現在の原型ができました。

■恋ヶ窪村分水(国分寺村外二ヶ村分水)

恋ヶ窪村分水は、国分寺村・恋ヶ窪村・貫井村の三ヶ村組合で田用水として願い出て、明暦3年(1657)に砂川分水、小川分水とともに許可されました。これは明暦元年(1655)の野火止用水に次いで2番目の分水で、この三ヶ村ともハケの湧水で水田を作っていましたが、水の安定確保と増産のためにさらに用水を必要としたのです。玉川上水(現鷹の橋付近)から引かれた国分寺村外二ヶ村分水は、五日市街道を越え、現在の窪東公園の西側を下り、府中街道の恋ヶ窪交差点でまず貫井村分水を分け、次に東恋ヶ窪5丁目交差点東で恋ヶ窪村分水と国分寺村分水に分かれました。

■砂川分水(用水)の延長に伴う取水口の切り替え

明治3年(1870)、玉川上水に船を浮かべ、武蔵野台地で穫れた作物などを江戸へ運ぶ通船が実施されました(水質悪化を招くとして2年で廃止)。このため従前34カ所あった分水口を半分の17カ所に統合し、玉川上水の北側には新堀用水を掘り、南側は砂川分水を延長し現砂川用水を掘り通水しました。このとき国分寺村外二ヶ村分水(恋ヶ窪村分水)は、砂川用水からの取水に切り替わりました。新しい取水口はそれまでの国分寺村外二ヶ村分水と五日市街道が交わる場所でした。



なお、この取水口付近には寛政元年（1789）から戸倉水車が稼働していました。戸倉水車は明治 23 年（1890）に火災に遭い、その後水車の位置を少し南に移して再建し、明治 35 年（1902）近くまで稼働していました。

③ 窪東公園

五日市街道から南下した国分寺村外二ヶ村分水（恋ヶ窪村分水）は、現在の窪東公園の西側を流れていました。窪東公園は東に幹線道路の府中街道が通っており、北側を除く三方を道路に囲まれています。かつて、この土地には高校のグラウンド及び幼稚園があり、ヒマラヤスギやイチョウ、八重桜、シダレヤナギなどの高木が多く植えられた広大な土地であったことから、昭和 36 年（1961）6 月に都市計画公園として計画決定されました。

平成 5 年度（1993）より土地の公有化や施設整備を実施し、平成 10 年（1998）4 月に開園。市内の公園では「けやき公園」に次いで 2 番目に大きな公園（14,098 m²）です。園内には大型の複合遊具、トイレ、あずまや等を設置し、親水施設（徒渉池、棲息池）、多目的広場（原っぱ）を配置した、子どもたちがのびのびと遊べる場所となっています。散策路は武蔵野の雑木林イメージした植栽とし、川の流れ（徒渉池）は公園西側に流れていた分水の流れをイメージしたものとなっています。

窪東公園は阪神淡路大震災直後に造成されたために、防災機能を有する公園として整備され、防火貯水槽（100t）や井戸、親水施設の水、簡易トイレ、ソーラー照明灯を設置しているほか、外周柵のないバリアフリーに配慮した公園となっています。また、災害時にはヘリコプターの緊急離発着場にもなっています。

④ 巖島弁財天（堀分弁天）

府中街道の恋ヶ窪交差点付近は、かつて国分寺村外二ヶ村分水から貫井村分水を分岐したところ。ここには現在、巖島弁財天があります。弁財天は古代インドの河川の女神で、日本では七福神の一人として祀られています。

この弁財天は、元は水車業を営んでいた戸倉昇家にありましたが、廃業したのち戸倉家の土地の外れにあたる現在地に移されました。明治 2 年（1869）の『神社書上帳』に「市杵嶋神社一弁財天祠 名主平次郎持」と記されています。

この弁財天が当初祀られていたのは、戸倉水車があった場所。五日市街道沿いに流れてきた南野中新田分水（砂川用水）が国分寺村外二ヶ村分水（恋ヶ窪村分水）と交わる場所で、寛政元年（1789）に設置されました。現在の御堂は平成 25 年（2013）10 月、恋ヶ窪交差点の改良工事に伴い新築されたものです。

弁財天を祀る氏子として弁天講が組織されていて、昭和 20 年（1945）以前は廻り番の宿でオヒマチ（集まってご馳走を食べる）を行っていましたが、それ以降は 4 月と 10 月の適当な日曜日を祭日として、4 月は社の近くで飲食をとり、10 月は弁財天を祀る他の場所にバス旅行に出かける等、数年前まで続けていたということです。



⑤ 松本製茶さん

かつての国分寺村外二ヶ村分水（恋ヶ窪村分水）付近には、現在もわずかですが畑が残っています。中央線で唯一、お茶を育てて販売まで行う松本製茶さんの茶畑はその一つ。父親のお茶づくりを受け継ぎ、茶師として 50 年以上の経験を持つ松本信一さんがつくる「国分寺茶」は、国分寺ブランドとして認定されています。

茶畑を見学し、松本さんにお話をうかがいました。その中で興味深かったのは、かつてはどの農家も畑の境界に茶を植え、それを自家用としていたとのこと。松本さんは自らの茶畑のお茶だけでなく、一円の農家の製茶も手広く引き受けていたのだそうです。また、貫井分水が分かれる一帯を“堀分”と呼び、分岐するところには水溜りがあり、よく降りて水遊びをしたとのこと。その分水が暗渠になったのは武蔵野線が開業（昭和 48 年・1973）した頃だったこと、かつて姿見の池のそばには姿見荘という料理屋や釣り堀もあったなど、地元の方ならではの思い出も語ってくれました。



⑥ JA 東京むさし国分寺支店

■旧国分寺役場跡

貫井分水を分岐した恋ヶ窪交差点の南東側は、旧国分寺役場跡です。明治 22 年（1889）の市制・町村制により国分寺村が誕生し、最初の村役場は現在の内藤橋付近に設けられました。当時としては大きな建物であったようです。ところが、火災により焼失し、その後付近で 2 度移転したあと、明治 44 年（1911）に現在 JA 東京むさし国分寺支店のあるところに村役場を新設。昭和 15 年（1940）に国分寺町となり、昭和 38 年（1963）3 月に現在市役所のある戸倉 1 丁目に移転するまで 52 年間村民・町民に利用されました。国分寺が市になったのは戸倉移転の翌 39 年 11 月です。なお、戸倉の旧本庁舎は耐震性能上の問題で平成 20 年（2008）に閉鎖、24 年に解体されています。

現在、泉町 2 丁目に新庁舎建設が進められており、令和 6（2024）年 9 月に完成、翌 7 年 1 月から使用を開始する予定となっています。

■司シルエット

JA 東京むさし国分寺支店の植込みや屋上庭園に、「司シルエット」と樹名表示されたモミジが植えられています。これは、北町の司メープル・田中豊さんが開発したイロハモミジの品種です。枝が広がらず狭い場所でも植えやすく、立ち姿が美しいことから公園や街路樹、庭木に最適と国内外で注目を集めています。

田中さんによると、司シルエットは自然交配から偶然に生まれました。種から育て 15 年ほどして、「これは他のモミジとは違うな」と思う 1 本がありました。ただ特別すごいものとは感じていなかったといいます。それがあるとき、アメリカの農場主 5 人が司メープルを訪れ、「あの変わったモミジは何だ!?!」。田中さんが「まだ名前はない」と話すと、農場主たちはその場で相談。「では〈司シルエット〉でどうだ」ということでこの名前になったの

だそうです。司シルエットは平成 21 年（2009）に農水省に申請し、23 年に品種登録が認められ、翌 24 年に国分寺ブランド第 1 号として認定されました。

⑦ 花き農家（勝栄花園さん）

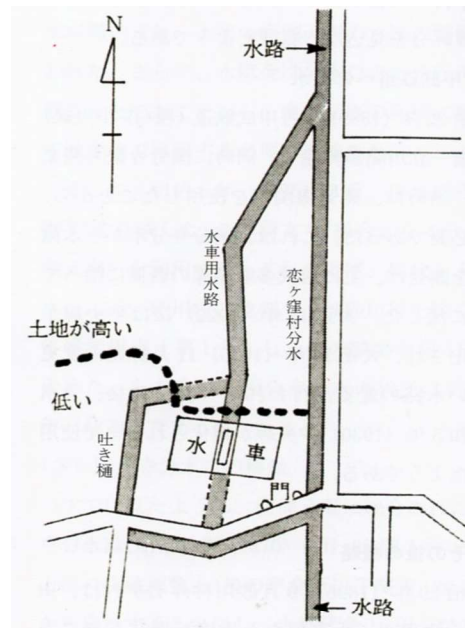
国分寺村外二ヶ村分水は東恋ヶ窪交差点で東に折れ、すぐに直進する国分寺村分水と南下する恋ヶ窪村分水に分かれました。恋ヶ窪村分水が始まったばかりの、その水路跡沿いで花づくりを行っている勝栄花園さんのハウスに立ち寄りしました。現在はビオラと南天をつくっているという鈴木勝さんは、仕事の手を休めて次のような話をしてくれました。

昔は大根、キャベツ、ウドなどの野菜をつくり、横浜まで担いで売りに行っていました。入港している船が現金で買ってくれるのが目当てだったようです。冬場はからっ風で赤土が舞い、やることもないので実家（恋ヶ窪谷）に帰っていました。分水は“カワ”と呼び、土手を含め 1 間ほどで流れの幅は 60 cm くらい。野菜の洗い場がありました。カワさらいは毎年やっていました。水はきれいでホテルがたくさん舞い、家に入ってくるので蚊帳を吊った記憶があります。



⑧ 廻し堀・鈴木水車跡

恋ヶ窪村分水には水車があり、その一つ鈴木水車は、享和 3 年（1803）恋ヶ窪村の名主作左衛門が設置しました。設置場所は、さんや谷の北側で、本流とは別に水車用水路を掘り、この水路には落差を設けて水車を回す力を大きくしました。水車用水路は図のように、恋ヶ窪村分水の本流から分岐しているため「廻し堀」と呼ばれます。また、水車用水路は水車場の上流で西側に「吐き樋」を分岐しています。吐き樋の分岐点に堰を設けて、水輪を止める時や水量が多いときに使用しました。吐き樋の末流は水車で使用した水とともに本流に戻しました。なお、廻し堀で落差を大きくする仕組みは、水路が傾斜面を流れている場所でないと採用できません。鈴木水車は大正 12 年（1923）まで稼働していました。



鈴木水車の水車用水路概念図
（『玉川上水の水利用と水車（I）』）

⑨ 戸倉新田分水跡

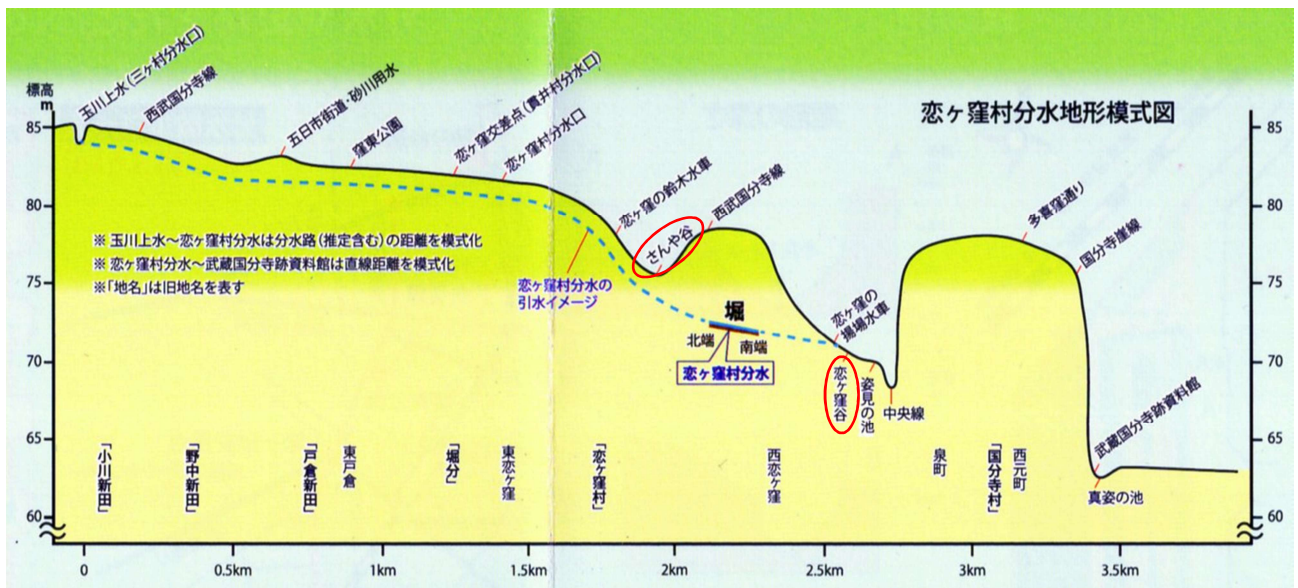
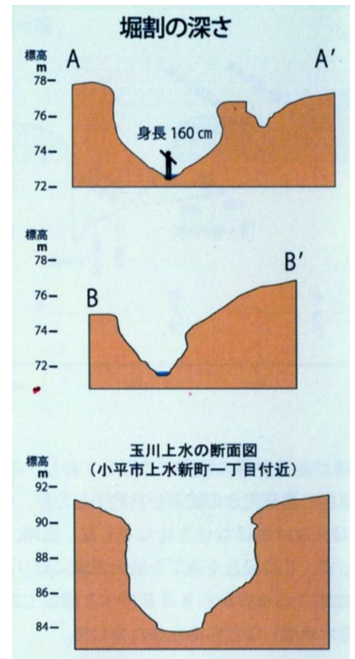
戸倉新田分水は、享保 14 年（1729）に開削された中藤新田分水を翌年延長して飲み水に利用した分水です。これを使っていたのは戸倉新田の中心部である現在の戸倉 4 丁目、3 丁目などに住む人々でした。戸倉分水は明治時代になって延長され、現在の東恋ヶ窪ライオン公園のところで流末が恋ヶ窪村分水に合流していました。

⑩ 市重要史跡 恋ヶ窪村分水

戸倉新田分水が恋ヶ窪村分水に合流していたあたりは、日立中央研究所の方へ続く谷地形でさんや谷といわれます。恋ヶ窪村分水は村の田用水確保が目的でしたが、その開削には、さんや谷と姿見の池に続く恋ヶ窪谷に挟まれた小高い台地を越えなければなりません。恋ヶ窪村分水が開削されたのは明暦3年（1657）ですが、当時、トンネル工法ともいえる胎内堀はまだ技術的に確立されておらず、この段丘を通すため大規模に掘り込む必要がありました。それが西武国分寺線の南、熊野神社下の交差点にかけて残る堀割です。

堀割は長く空堀の状態では保存されていましたが、平成29年（2017）、緑地整備に伴い発掘調査を実施。その結果、堀割の形状は箱薬研（はこやげん）で、堀幅の上面は約6~9m、深さは約5.2~5.5mであること。また、当初から玉川上水に匹敵するほどの規模で掘削され、堀の底部から50cmの深さまで水が流れていた痕跡が確認されました。通水のため分水として機能していた時期に遡る遺物は少なかったものの、江戸時代の植木鉢やすり鉢、陶磁器の皿が数点発見され、空堀となつてからはコーラ瓶などが投棄されていました。

この調査の結果、恋ヶ窪村分水の大規模な堀割は当時の姿を残す土木遺産として貴重であることから、開削から360年にあたる平成29年に市重要史跡に指定され、翌年7月に恋ヶ窪用水路周辺緑地として整備されました。



⑪ 熊野神社

「市重要史跡 恋ヶ窪村分水」のすぐ南側には市内最古の神社、熊野神社があり、境内に聖護院道興准后（しょうごいんどうこうじゅごう）の歌、「朽ち果てぬ名のみ残れる恋ヶ窪 今とは訪うも知記（ちぎり）ならずや」を刻んだ碑や芭蕉と郷土の俳人の句碑もあります。

■熊野神社の縁起

熊野神社の祭神はイザナギノミコト、イザナミノミコト。和歌山県熊野神宮の大神を勧請（かんじょう）したものとされます。本神社の由緒については『神社明細帳』（明治12年・1879）に、「勧請起源は不詳だが元弘、建武の頃、新田義貞と鎌倉勢との兵火で焼失。応永年間（1394～1428）に社殿を再建した。文明18年（1486）5月、聖護院道興准后が東行の折、「朽ち果てぬ名のみ残れる恋ヶ窪 今とは訪うも知記ならずや」という御歌の御奉額があった。天正18年（1590）、社殿、御奉額とも兵火に焼失したと里人の申し伝えがある。慶長2年（1597）9月9日今の社殿を建築し、再勧請した。」とあります。

■聖護院道興准后と廻国雑記

道興准后は後の知足院関白近衛房嗣（ふさつぐ）の子で、天台宗本山派修験道の総本山京都聖護院の門跡となり、准三后（じゅさんごう）の称号を賜り、道興准后と称されました。文明18年（1486）、57歳の道興は6月に京都を出発し、北陸の諸国を経て関東に入り、同年暮れに近い頃、恋ヶ窪に立ち寄りました。

恋ヶ窪で道興准后一行を饗応宿泊させたのは、恋ヶ窪（廃）寺の良運律師ではないかと思われています。恋ヶ窪廃寺の堂址から延徳元年

（1489）良運律師の追善供養をしたという板碑が出土しており、道興准后一行が訪れた頃は良運律師が恋ヶ窪寺の住職であったようで、道興准后一行を饗宴した可能性は大きいと考えられています。

道興准后は文明18～19年の北陸・関東・奥州の旅行記として『廻国雑記』を残し、先の歌も収め、これは江戸時代後期に群書類従の紀行部として版行（板行）されました。



⑫ 揚場水車跡

揚場（あげば）とは、生糸をつくる工程の内の「揚げ返し（あげかえし）」と呼ばれる作業を行う工場のことで、この工場用の動力として明治37年（1904）に水車が設置され、大正5年（1916）頃まで営業していました。当時は養蚕が盛んで、農家では繭から生糸を小型の枠に巻き取る作業を行っていました。揚げ返しとは、その小枠から数本を束ねて大枠に巻き直して製品化する作業です。

⑬ 水田跡

揚場水車跡の下手一帯は、南北に入り込んだ恋ヶ窪谷に形成された集落で、かつての恋ヶ窪村本村です。ここでは湧水を利用して大昔から米が作られており、用水の安定化と水

田の拡張により増産をはかることが、恋ヶ窪村分水の第一の目的でした。

昭和 20 年（1945）頃、ハケ下には 24 軒の家があり、中央を南北に走る道の東側、西側ともほぼ同様に田、屋敷、そしてハケ上に畑が並び、田植えや収穫期には家族総出で作業を行っていました。昭和 30 年代になって上流に工場などが進出し、汚水が流入して水田ができなくなり、昭和 48 年（1973）に JA 武蔵野線ができた頃にほとんどが埋め立てられ、住宅が建つようになりました。



姿見の池付近(西恋ヶ窪 1 丁目)の水田風景(昭和 33 年)

⑩ 東福寺

開山は約 700 年前の鎌倉時代初期と伝えられ、戦国時代の享禄元年（1528）に中興、江戸時代前期の元和 7 年（1621）に再興されました。『江戸名所図会』（天保 5 年・1834）の恋ヶ窪村に熊野神社などとともに東福寺も描かれています。ここには夙妻太夫（あさづまだゆう）伝説に因む傾城墓と一葉松（ひとはまつ）があります。傾城とは遊女のことです。

■夙妻太夫伝説

鎌倉時代、姿見の池付近は鎌倉街道の恋ヶ窪宿として繁盛していました。旅籠屋には遊女がおり、なかでも有名なのが夙妻太夫です。この太夫と恋仲になったのが、菅谷館（現在の埼玉県比企郡嵐山町）から鎌倉出仕のおりに恋ヶ窪宿に立ち寄った、坂東武士の鑑といわれた畠山重忠でした。重忠は平家討伐の際、義経に従って西国に出陣します。あるとき、帰還を待ちわびる太夫に、彼女に横恋慕していた男が「重忠は討ち死にした」と嘘の話を伝えます。それを聞いた太夫は、絶望のあまり姿見の池に身を投げて亡くなったということです。

■一葉松〈植樹記念碑より〉

「鎌倉時代の初め、この地に秩父荘司畠山次郎重忠への純愛を貫き、自ら果てた傾城夙妻と呼ばれた美女がいました。里人が夙妻の心根を憐れんで菩提を弔うため、墓の傍らに一本の松を植えました。この松は一葉を携えるのみにして、年を重ねるにつれて重忠が赴いた西の方へ傾く風情があり、いたく里人の心を打ちました。誰が呼び初めたのか、傾城の松、一葉松というようになりました。年を経てこの松は朽ちてしまいましたが、その実より新しい松が育ちました。樹令 300 年以上、樹高 25m、幹周り 3.5m になったと記録にあります。これが 2 代目松で、昭和 56 年（1981）12 月 1 日に伐られるまで旧名主鈴木家の屋敷内に聳えていました。その幹は、高くまっすぐ伸び、枝の広がり方は奥ゆかしく上品で、多くの人を魅了しました。昔は、街道の道しるべとして遠くから眺められた時もありました。」

現在のものは 3 代目です。

⑪ 姿見の池

このあたりに鎌倉時代には恋ヶ窪宿があり、旅人や遊女達が自分の姿を鏡代わりに池の

水面に映していたことから、姿見の池と呼ばれるようになったといわれています。姿見の池は野川の最上流部の水源で、恋ヶ窪村分水につながっていました。分水は池の周りを通って野川に注いでいて、この地域も水田地帯でした。

平成 3 年（1991）、国分寺市の隣の小平市にある新小平駅が大量の地下水の流れ込みにより水没し、武蔵野線が数カ月にもわたってこの区間で運休するという事態が発生しました。武蔵野線トンネルのそばの西恋ヶ窪 3 丁目においても地下水位が上昇し、床下浸水の被害が発生。浸水の原因は地下水の流れの変化と、それにより地下水の上流部分で地下水位の上昇現象が起きたことによるものであるとのことでした。

JR はトンネル内部に水抜きのための横穴を設け、地下水の抜き取りを開始することにしました。そのおり、国分寺市、東京都、JR 東日本は、この抜き取った地下水を有効活用する協議を重ね、1 日最大 3,000 トンを姿見の池に導水する事業を進めることとしました。姿見の池は、周辺の宅地化とともに昭和の半ば頃から埋め立てられていましたが、平成 12 年（2000）に武蔵野線トンネル内の地下水導水工事に着手し、同 14 年から水をたたえた今の池に復活しました。



この姿見の池の見学のあと、参加者の皆さんに今回のエコミュージアムについてアンケートをお願いし、国分寺駅方向へ帰られる方とはここで解散。残りの方々は日影山を通過して最終解散場所の西国分寺駅へ向かい、第 13 回エコミュージアムは無事終了しました。

【参考文献】

『国分寺市史 中巻』国分寺市市史編さん委員会 1990 年／『ふるさと国分寺のあゆみ』国分寺市史編さん委員会 1993 年／『国分寺の民俗五一本多新田・恋ヶ窪村の民俗一』国分寺市教育委員会 1995 年／『国分寺市重要史跡 恋ヶ窪村分水の調査』国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会 2020 年／『恋ヶ窪用水路周辺緑地 市重要史跡恋ヶ窪村分水』国分寺市教育委員会ふるさと文化財課 2023 年／『恋ヶ窪村分水市重要史跡指定記念 平成 30 年度歴史講演会「国分寺市内の玉川上水分水・水車」記録集』国分寺市教育委員会 2019 年／『市内文化財めぐり 国分寺市内の玉川上水の分水一玉川上水から姿見の池一』国分寺市教育委員会ふるさと文化財課 2019 年／『国分寺市制 30 周年記念写真集 アルバム国分寺』国分寺市 1994 年

第 13 回エコミュージアム国分寺
共催 エックス山等市民協議会
国分寺市